「国風文化」を中心とする日本文化史の再検討

Nara Women's University

人文科学系・人文社会学領域　**西村　さとみ**　教授　NISHIMURA　Satomi　博士(文学)(奈良女子大学)

■研究キーワード　文化史／日本意識／言語観／歴史観

■主な所属学会　日本史研究会／大阪歴史学会

■研究者総覧　https://koto10.nara-wu.ac.jp/profile/ja.1a2ea3eb613b8e9c520e17560c007669.html　研究者総覧

研究概要

「日本」という語が意味するものは時代によりいかに変化してきたのか。「日本的」なるものはどのように形成され、変容しながら現在にいたっているのか。こうした問いをめぐり、「日本風」と称される「国風文化」が創造された平安時代を中心に研究をおこなっています。

研究に際しては、私たちが「国風」「日本風」ととらえる現象を当時の人びとがどう認識していたかを解明する観点から、以下の語句や事象に着目して考察を進めています。

・人と人との関係の構築、再編を媒介するものとしての言語、都市
・「日本」を意識させ、またその意識を反映するものとしての言語観、歴史観、空間認識

アピールポイント

9世紀末の遣唐使の派遣停止により日本独自の文化が開花したとする、いわゆる「国風文化」論は、以後も続いた大陸との交流や文学・芸術などにみられる大陸文化の影響が指摘され、再検討が進んでいます。しかしながら、諸事象を構造的に把握する視点が見いだされず、当該期の文化をめぐる新たな共通理解はいまだ得られてはいません。

本研究は、そうした現状をふまえ、いつの時代にも起こりうる文化の受容と創造をめぐる営為を、同時代の人びとの自己認識を問題化する、文化の受容・創造の主体として自明視されがちな「日本」のありようを問う、という方法により、当該期の文化を歴史過程においてとらえなおすことを目指す点に特色と可能性があると考えています。

これまで「国風」や「和」と「唐」「漢」といった語の用法、和歌や仮名散文などの言語表現をめぐる認識、「我が朝」のミヤコと境界についての認識の考察などを通して、9世紀から10世紀にかけて風俗の多様性への意識が高まり、その差異により分立する国々からなる世界が構想されたこと、「和」の風俗を共有する人びとをおもな成員とする「日本」の認識が形成されるとともに、そうした関係性において文化が育まれたことを論じてきました。

そこにみられる変化は何ゆえに生じたのか。国際秩序の転換と密接にかかわりながら存立のしかたを変容させていく「日本」の姿を長期的な視野でとらえなおすことは、現代社会の課題について考えることにも通じているはずです。

また以上の考察には、文化を政治や経済、外交といった分類を前提に論じることへの疑問も含まれています。それを緒に、文化史の方法や射程についても研究を深めていきたいと考えています。

お問い合わせ：奈良女子大学社会連携センター　Tel:0742-20-3734　Mail:liaison@cc.nara-wu.ac.jp

更新日：2025年1月1日